

狩と恋 — 伊勢物語ノート —

上野英二

ここに、貴公子がいる。彼は、成年を迎えたばかり。成年に達して、彼が真先にしたこと、それは狩であった。狩に出て、彼は世にも稀な美女に巡り会う。そして、心奪われてしまう。

昔、男、うひかうぶりして、奈良の京春日の里にしるよしむて、狩にいにけり。その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。この男、垣間見てけり。思ほえず、古里に、いとはしたなくてありければ、心地惑ひにけり。男の、着たりける狩衣の裾を切りて、歌を書きて遣る。その男、信夫摺りの狩衣をなむ着たりける。

春日野の若紫のすり衣しのぶの乱れ限り知られずとなむ、老いづきて言い遣りける。ついで面白きことゝもや思ひけむ、

みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑに乱れそめにし我ならなく
に
といふ歌の心ばへなり。昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。

言うまでもなく、『伊勢物語』初段（定家本）。『伊勢物語』の主人公は、こうしてその、「男」としての人生のスタートを切った。しかしそれは、『伊勢物語』の男だけに留まらない。成人を迎えて狩に出掛け、美女に巡り会った貴公子、それは彼一人ではなかった。

「場面はお伽話時代のドイツで展開される」。

第一幕 お城の前の庭園。

〈場面一〉

ベンノと友人たちが、王子ジークフリートの成人を一緒に陽気

にお祝いしようとして、彼を待っている。ジークフリートがヴォルフガングとともに現れる。祝宴が始まる——。

〈場面二〉

——侍従たちが続いて、王妃が登場する。ジークフリートが母を出迎え、恭しく挨拶する。——彼女は彼が友人たちと楽しんでいるのを邪魔しに来たのではなく、もう彼の独身生活の最後の日が来ていて、明日には結婚しなければならぬことを確認しに来たのである——。

〈場面三〉

王子は浮かない顔をしている。彼は気ままな独身生活に別れを告げるのが悲しい——。

〈場面五〉

白鳥の群が飛んでくる。若者たちは眠るどころではない。白鳥が見えたので、彼らはこの日を狩猟で終わらせることにする——。

第二幕 岩の多い荒れ果てた場所。舞台奥に湖。右手、湖畔に小さな聖堂の廃墟。月夜。

〈場面一〉

湖には一群の白鳥が泳いでいる。白鳥たちの先頭に、頭に王冠を頂いた白鳥がいる。

〈場面二〉

——白鳥たちは若く美しい娘たちに姿を変え、ペンノを取り囲む。——若者たちは彼女たちを撃とうと構える。王子も登場し

て、やはり狙いを定める。しかしこの時廃墟が魔術的な光に照らされて、オデットが登場し、許しを乞う。

〈場面三〉

ジークフリートは彼女の美しさにうたれて、友人たちに撃たないように命じる。彼女は彼に感謝し、王女オデットである自分と自分に仕える娘たちは、彼女らを魔法にかけた悪魔の哀れな犠牲者であって、昼間は白鳥の姿をしていなくてはならず、夜のあいだだけ、この廃墟のそばで人間の姿に帰ることができるのであると語る。——ジークフリートは魅惑されて、オデットの話聞いています——。(2)

バレエ『白鳥の湖』。チャイコフスキーの音楽によって著名な『白鳥の湖』にも、『伊勢物語』初段に似た物語が展開される。「お伽話時代のドイツ」の王子ジークフリート、彼もまた、成人の直後に狩に出掛け、美女と出会い、恋に落ちるのだった。(3)

なぜ彼等は、成人の直後に狩に出るのか。なぜ彼等は、そこで美女に巡り会うのか。そしてなぜ、彼等はかくも似るのか。

二

世界の狩猟民族においては、狩によって一人前の獲物を得られるようになることが、大人の男として認められるための条件とされ、しかるべき獲物を仕留めて来ることが成人のための通過儀礼として

青年に求められることがしばしばあった。アメリカ・インディアンの一部族では、独力で灰色熊を倒し、その爪を持って帰ることが、成年の要件とされたし、アフリカのマサイ族では、一人でライオンを仕留めて来ることが青年に求められた。

若ものはその内的生長と歩調を合わせて、徐々に新生活に導かれるのであって、それは少年期の放棄と拒否に符合し、自ら周知の明白な現実を越えた知恵と理解への欲求を確立し、英雄待望へは個人的指導者をあてがい、自己の熱意と決心に見合う宗教的展望をしいにもたせるようにする。

血縁の兄弟からなる禁欲集団のなかで、かれは新しい技術と秘術を学び、宗教的儀式を通じて過去と未来の知識にかれを結びつける苦痛と試練に耐える。狩猟人の永遠の化身として、かれはウマかゾウを狩猟することで人間的にならなければならぬ。

(ポール・シェパード『狩猟人の系譜 反農耕文明論への人間学的アプローチ』小原秀雄・根津真幸共訳)

狩猟民族にとっては、狩によって獲物を得ることが、何よりも生存のための要件であったし、危険の大きい獲物に独力で立ち向うことは、少年には大きな試練であって、それは少年に成長を促すものでもあった。かくして狩は、イニシエーション、男子成人のための通過儀礼ともなったのである。狩猟民族の青年は、一人前の狩猟の

能力を証明すべく、ライオンや熊などの獲物を追って成年式としての狩に旅立った。

とすれば、『伊勢物語』初段の男、そして『白鳥の湖』のジークフリートも、成年式としての狩に赴いたのであろうか。

たしかにヨーロッパ中世、『白鳥の湖』の舞台とされた「お伽話時代のドイツ」にあつて、狩は一人前の騎士となるための条件の一つであった。

騎士として士^{ナイト}爵の資格を得るための候補者の修業は長くかかり、むづかしいものであつた。七歳になると、貴族の男の子たちは父の家から将来の保護者の宮廷或ひは城に移された。さうして教儀問答を教へたり、長上に対する礼儀、宮廷の儀式などに就いての躰をする監督者に預けられた。(中略)その暇には舞踏や堅琴を弾くことを習ひ、森や河の秘密、即ち狩猟、鷹狩、漁猟に就いて教へられ、角力、馬上の槍試合、そのほか馬上の武術一般を仕込まれた。

(ブルフィンチ『中世騎士物語』野上弥生子訳)

「お伽話時代のドイツ」の「王子ジークフリート」の面影は、恐らく「中世騎士」のそれに通じるものと考えてよいであろうが、その「修業」の様態は、そのまま「狩猟人」のそれに重なっている。

過去五十万年にわたり、大抵の人間社会では、およそ十二歳に

なると少年は、こんにち現存狩獵人の間にみられるように、
家族の輪からはなれて、指導者のもとで訓練・学習する集団へ
とはいふようだ。

(「狩獵人の系譜」)

しかし、この一致を以って、ジークフリートの狩を成年式のそれ
と見做すことは、恐らく誤りであろう。なぜなら、たしかにヨー
ロッパの中世においては、狩獵の能力は一人前の騎士の持つべき能
力ではあったが、騎士の叙任式などで乗馬や槍術などの戦闘能力が
試されることはあつても、狩獵それ自身が成年式とされていた形跡
は、差し当って見出せないからである。

事情は、『伊勢物語』初段についても変らない。日本の平安朝にお
いても、狩獵それ自身が成年式とされたことは無かった。

ジークフリートも『伊勢物語』初段の男も、大きな獲物を仕留め
ることで、自らの成人を証明して見せたわけではない。

むしろ、彼等の狩は、成人以前の彼等の習慣の延長としてのそれ
として理解すべきものであらう。例えば『今昔物語集』には、在原
業平と同時代の藤原高藤の、弱年の日の狩の逸話が収められてい
る。

而ルニ、其ノ良門ノ内舍人ノ御子ニ、高藤ト申ス人御ケリ。幼ク御ケ
ル時ヨリ、鷹ヲナナ好ミ給ケ。父ノ内舍人モ鷹ヲ好ミ給レバ、此ノ君モ伝
ヘテ好ミ給ベシ。

而ル間、年十五六歳許ノ程ニ、九月許ノ比、此ノ君、鷹狩ニ出給

リ。ニヶ 南山階ト云フ所ノ渚ノ山ノ程ヲ仕ヒ行キ給ニ、申時許ニ俄擲暗
ガリ 霖降り大キニ風吹キ、雷電霹靂バンケレ共ノ者共モ、各ノ馳散テ行
キ分レテ、雨宿ラセム皆ナ向タル方ニ行ヌ。

(巻第二二 高藤内大臣語第七)

高藤は、「幼ク御ケル時ヨリ、鷹狩を好んだと言う。続く「年十五六
歳許」の「鷹狩」も、この場合元服以前と見るべきであらう。

この日、「南山階」へ「鷹狩」に出掛けた高藤を、にわか雷雨が襲
う。供人達は雲散霧消、高藤は一人雨宿りのために迷い入った屋敷
で「年十三四許有ル若キ女」のもてなしを受け、契りを結ぶに至る。
翌日、高藤は無事帰宅するが、息子の行方不明を心配した父「内舍
人」、藤原良門は高藤に次のように論ずるのであった。

「幼カラ程ハ、此ノ様ノ行キハ不可制ズ也。我レガ心ニ任セテ鷹仕ヒ行
キシ、故父ノ殿ノ制シ不給ザリシ、此モ任セテ遊ニ、此ル事ノ有レバ、極
テ後目タ无シ。今ハ、幼カラ程ハ此ル行キ速ニ可止」

この訓戒は、日本の平安朝においても、狩が成年以前にも行われ
ていたことを示す好例であらう。

元服以前の狩は、藤原師輔『九条右丞相遺誠』にも見えている。

凡成長頗知「物情」之時、朝説「書伝」、次学「書跡」。其後許諸遊
戯。但鷹犬博奕、重所禁遏矣。元服之後、未趨官途之前、

其所為亦如此。

これらの制禁は、元服以前の狩の盛行を、逆に推測させるものでもある。

「鷹犬」すなわち狩は、成人以前の男子にとって、大いなる「遊戲」の一つなのであった。故に彼等は、狩に出掛けた。高藤も、またその父良門もその一人であつたであらう。そしてまた、ジークフリートも、『伊勢物語』の男も。

狩は、それ自体楽しかるべき、「あそび」でもあつたのである。⁽⁴⁾

若ものにとってゾウに忍びよることは、やり甲斐のある冒険である。打ちかたなければならぬ危険としてだけでなく、それがもたらす感情が、崇高で、かつ高揚的で拡散的だからである。

（『狩獵人の系譜』）

若者は、狩自体の楽しさのゆえに、狩を楽しんだ。

しかしなお、狩が「冒険」であり、若者にとって「危険」なものであったことは留意されてよい。それは何より、高藤への父良門の訓戒によつても知られるところである。「雷電霹靂」その他、いつ何時、いかなる「危険」が彼等を襲うか知れない。狩は決して安逸な楽しみではなかつた。

しかし、だからこそ若者は、この「危険」に満ちた「やり甲斐のある冒険」に駆り立てられたのであらう。「危険」と楽しさは裏腹で

ある。「危険」であるがゆえに、狩は魅惑的であり、若者に「高揚」をもたらし、「危険」であるがゆえに、狩は若者にとっては大きな訓練となつて、若者に成長を促すのである。たとえ本人にとっては「あそび」に過ぎないものであつても、依然、狩は男子成人のための訓練としての意義を失つてはいない。

たしかに、少年が一人前の大人としての認知を受けるのは、儀式としての成年式であらう。儀式はまた、その当事者に成人としての自覚を促すであらう。しかし、成人の実質は、むしろ儀式以外のところにある。日常の様々な経験、訓練とその克服を通して、少年は大人になるのであり、その一端を担ったのが狩なのであつた。狩に出る若者達は、期せずして大人への階梯を登つたのである。

だから、成年を迎えた狩好きの若者は、意気揚々と狩に出たはずである。天下晴れて大人として認められた自負と喜び、待ち受ける「危険」への期待と「高揚」。そこには、成人男子としての自由と可能性とを手にした者の、希望に満ちた姿があつたはずである。

『伊勢物語』初段の男も同様。「うひかうぶり」に関わる諸儀式を滞りなく済ませ、心機一転。成人貴族としての権能と期待とを一身に背負つて、勇躍彼は「しるよし」ある「奈良の京春日の里」へ出遊し、自らその地で狩を主宰し、「やり甲斐のある冒険」に臨んだ。そこに颯爽たる男の姿のあつたであらうこと、想像に難くない。

ただし、ジークフリートはそうではなかつた。「彼は浮かない顔をしてい」た。

勿論、ジークフリートにとつても、狩が大人への成長を促す機能

を持つていたものであることは言うまでもない。彼もまた、大人への実質的な成長を果たすべく狩に出た。しかし、それは当事者の意識の埒外のことであって、ジークフリート自身の意識は別のところにあった。

「彼は気ままな独身生活に別れを告げるのが悲し」かった。母である王妃が「もう彼の独身生活の最後の日が来ていて、明日には結婚しなければならぬことを確認しに来たのである」。

では、彼としては、何ゆえに狩に出たのか。

『狩獵人の系譜』は、「怒りは若ものの本性の一部である」と言い、若者はそれゆえに狩に出るのだと言う。

若ものの怒りは二つの意味がある。すなわち、かれをして過去から顔をそむけさせ、意味のある出会いへ向けて突進させることである。それはフットボール・チームの怒りであり、正々堂々たる、攻撃的な喜びである。怒りはゾウのようなものへ向けられる。怒りは槍をもって突撃するのに必要である。かりにゾウが口をきけたとすると、「われわれはそのためにいるのさ」というかもしれない。

ジークフリートにも、何らかの「怒り」があったのではないか。『狩獵人の系譜』は、若者の持つ「怒り」の例として、「少年期の日常的些事と両親の口やかましさにたいするいらだち」、「少年期の家庭のしきたりへの激しい抵抗」、「古い仲間との絆を解消することへ

の対応」、「青年期に体験した不安の形態すべて」等を挙げている。このときの、ジークフリートの抱いた感情は「悲し」みであったけれども、それが母親の告げた結婚決定の報に由来するものであるとすれば、その「悲し」みが、「両親の口やかましさにたいするいらだち」や「家庭のしきたりへの激しい抵抗」に連関するものであること、容易に想像されよう。ジークフリートもまた、「若ものの本性の一部である」「怒り」のもと、狩に出たものと覚しい。

狩は、「あそび」であり、たしかに楽しい。しかし、その楽しさを求める心は、決して単純なものではなかったのである。『伊勢物語』の男とて、最早成年である。子供の遊びに出掛けたわけではあるまい。

成人を迎える若者の心も、必ずしも喜び一辺倒ではなかったであろう。喜びと「怒り」、期待と不安。

『伊勢物語』初段の男は、「うひかうぶり」を済ませるや、成年貴族としての新生活が始まるべき都に背を向けて、「奈良の京春日の里」へ赴いたと言う。狩は、少年に成長を促す一方で、「遊戯」であるがゆえに固く禁じられてもいる。それにも拘らず、彼は狩に出掛けたのである⁽⁵⁾。

成人を迎えて真先に狩に出掛けた貴公子達。彼等の心には、いささか複雑なものがあつたのではなからうか。そうした複雑さを抱えつつ、彼等は狩に出たと考えるべきではないか。⁽⁶⁾

三

美女との出会いも束の間、ジークフリートはやがて悲劇の死を迎えることになってしまふ。一方、『伊勢物語』の男は、初段以後もしばしば狩に出掛けた。

少くとも『伊勢物語』に見る限り、『伊勢物語』の男は狩を好んだ。

あやめ刈り君は沼にぞまどひける我は野に出でゝ狩るぞわびしき

とて、雉をなむ遣りける。

(五二段)

こと人はいと情無し、いかでこの在五中将に合はせてしかなど思ふ心あり。狩し歩きけるに行き会ひて、

(六三段)

伊勢の国に狩の使に行きけるに、

朝には狩に出だし立てゝやり、夕きりは帰りつゝ、そこに来させけり。

狩に出でぬ

(六九段)

昔、男、狩の使より帰り来けるに、

(七〇段)

狩はねむごろにもせて、酒をのみ飲みつゝ、やまとうたにかゝ

れりけり。いま狩する交野の渚の家、その院の桜ことに面白し。

(八二段)

昔、水無瀬に通ひ給ひし惟喬の親王、例の狩しにおはします供に、馬の頭なる翁仕れり。

(八三段)

昔、仁和の帝、芹河に行幸し給ひける時、今はさること似げなく思ひけれど、もとつきにけることなれば、大鷹の鷹飼ひにて候はせ給ひける、摺狩衣の袂に書き付けゝる、

(一一四段)

野とならば鶉となりて鳴きをらむかりにだにやは君は来ざらむ

(一二三段)

さらに、五二段「雉をなむやりける」に徴して、

九月ばかりに、梅の造り枝に雉を付けて奉るとて、

(九八段)⁸⁾

六九段、七〇段「狩の使」に徴して、

昔、男、伊勢の斎の宮に、内裏の御使にて参れりければ、

(七一段)

等を、狩を語った段として追加することができよう。

『伊勢物語』の男の、狩への好尚は、初段に留まるものではな

かったのである。初段の狩は、むしろ、男のこうした好尚の前蹤をなすものとして理解すべきものであった。

決して長い作品ではない『伊勢物語』、その決して少なくはない章段に、狩の記事が受け継がれることは、どのような意味を持つか。事は初段、「うひかうぶり」にのみ関わるものではなかった。『伊勢物語』という作品を考える上で、あるいはその主人公を考える上で、狩は大きな意味を持つものであったと思われる。

狩に加えて、『伊勢物語』の男の歌には釣への関心も見られる。前掲七〇段の和歌、

みるめ刈るかたやいづこぞ棹さして我に教へよ海人の釣舟

(七〇段)

あるいは、八一段の歌、

塩釜にいつか来にけむ朝風に釣する海人はこゝに寄らなむ

(八一段)

野性の生き物を捕食する手段としては、狩も釣も振ぶところがない。いずれも、知力、体力の限りを尽して、鳥獣、魚類と格闘し、その生命を奪い取って我物としようとするものである。「魚は野獣である」。「釣魚は現代においては狩猟そのものであり、狩猟よりはるかにむずかしい技術であり、考える遊戯の最高のものののだ」(森秀人『完訳『釣魚大全』訳者解題)とすれば、『伊勢物語』の

男の狩への好尚と、こうした和歌に釣が詠まれることは、無縁のことではないであらう。

七〇段においては、釣は狩に連続するものであった。

昔、男、狩の使より帰り来けるに、大淀の渡りに宿りて、斎の宮の童べに言ひかけける、

みるめ刈るかたやいづこぞ棹さして我に教へよ海人の釣舟

釣ばかりではない。この段には、もう一つ狩に関連する行為が語られている。すなわち、狩ならぬ「刈り」、「みるめ(海松布)」を「刈る」行為である。農耕以前、動植物の採集は、漁猟と並ぶ食糧調達の手段であった。狩も、「刈り」も、釣も、動植物を獲得する行為としては、一連のものであった。しかも「刈り」は、力づくで自然界から食物を奪取して来るといふ荒々しさの点においても、狩に類似する。恐らく「刈り」には、鋭利な刃物が用いられることもあったであらう。

ふたたび五二段の歌。

昔、男ありけり。人のもとよりかさなりちまき遣せたりける、返り事に、

あやめ刈り君は沼にぞまどひける我は野に出でゝ狩るぞわびしき

とて、雉をなむ遣りける。

「あやめ刈り」に対して「狩る」、「沼にぞまどひける」に対して「野に出で」。 「君」と「我」との整然たる対照は、恐らくは女と男であらう、「君」と「我」との隔絶を浮上させる。 分けても、「刈り」と「狩る」との語形上の類似と、意味上の類同とが、その対照の要となっていることは、言うまでもない。 この歌においては、「刈り」と狩とは類比すべきものとして対置されている。

「人」は恐らく女。 五月五日、端午の節供に因んで、男のもとに「かさなりちまき」、他本によれば「飾り粽」を送って来た。 男はその日、留守であった。 あいにく狩に出たのであらう。 慌てて男は、その日の獲物「雉」に歌を添えて贈り、女の氣を取り結んだ。 あなたは、「あやめ刈り」で「沼」にはまり込んででもいたのでしょう。 お互い間が悪いことで、お会いできませんでしたが、何とも寂しい限りでした。「狩るぞわびしき」には「離るぞわびしき」の思ひが懸けられていたのではないだろうか。

ただし、「あやめ刈り」の「刈り」は、必ずしも食糧採集のための「刈り」ではない。 けれども、刈り取られたであらう「あやめ」は、恐らくこの日届けられた食糧「飾り粽」に彩りを添えたものであらうし、それを奪取して来る激しさの点においても、依然、それは、狩との連関を失っていないと思われる。

「刈り」は他に四例、『伊勢物語』の中にその用例を見出すことができる。

恋ひわびぬ海人の刈る藻に宿るてふわれから身をもくだきつるかな
(五七段)

海人の刈る藻に住む虫のわれからと音をこそ泣かめ世をば恨みじ
(六五段)

袖濡れて海人の刈り干すわたつうみのみるを会ふにてやまむとやする
(七五段)

その隣なりける宮ばらに、こともなき女どもの、田舎なりければ、田刈らむとて、この男のあるを見て、
(五八段)

「海人の刈る藻」も「海人の刈り干す」も、それぞれ「我から」、「見る」を引き出すための序詞であるが、なおここでは虫の「われから」、海藻の「海松」とともに、「海人」が海藻を「刈る」イメージは、具体的に喚起されると思われる。 五八段の「刈り」は農耕に関わるものではあるが、動作自体は紛れもない「刈り」である。 これらの「刈り」も、『伊勢物語』の男の好んだ、狩や釣に繋がるものとして考えてよいのではないか。

こうして見るならば、『伊勢物語』の男がいかに狩を好んだか、狩のみならず、釣や「刈り」、狩猟採集に関わることにいかに関心を払うものであるか、改めて認識を迫まられることになるであらう。

『伊勢物語』の男は、狩を好んだ。 のみならず、その関心は釣や

「刈り」に及んだ。言い換えるならば、『伊勢物語』の男は、獲物を力づくで、あるいは知略を以って奪取して来ることに、大きな関心を寄せていたということになる。それは、いかなることであつたのか。

四

そもそも、狩とは何を狩るものであつたのであろうか。

五二段「雉をなむ遣りける」によれば、その獲物の一つは、雉。

一二三段によるならば、鶉もまたその一つであつたであらう。あるいは一二四段。歌に、

翁さび人な咎めそ狩衣今日はかりとぞ鶉も鳴くなる

とあるところからすれば、鶉もまた狩の獲物であつた。⁽⁹⁾

しかし、果たして狩の獲物は、それだけに留まるものであつたであらうか。

ふたたび、一二三段。

昔、男ありけり。深草に住みける女を、やうく飽き方にや思ひけむ、かゝる歌を詠みけり。

年を経て住み来し里を出でゝいなばいと深草野とやなりなむ

女、返し、

野とならば鶉となりて鳴きをらむかりにだにやは君は来ざらむ

と詠めりけるにめでゝ、行かむと思ふ心なくなりけり。

心の離れた男の歌に対して、女はいじらしくも自ら鶉に身をやつしても、あなたを待ちますと詠んだ。あなたが行ってしまったら、この深草の里は一層草深い野となってしまうでしょう。もしそうになったら、私は鶉になって泣いています。狩好きのあなたのこと、鶉となった私を狩に、せめてお出にならないことがあるでしょうか。切ない女の、「かりにだにやは君は来ざらむ」の訴えに感じて、男は心を翻したと言う。

『伊勢物語』において狩の獲物が何であつたか、すでに明らかであらう。この狩の真の対象は、鶉ならぬ女であつた。⁽¹⁰⁾

「⁽¹¹⁾cat hunt」と言い、love huntと言う。また、鶉色と言ひ、漁色と言う。狩は恋であつた。ここに『伊勢物語』の狩の本質がいかなるものであつたか、明らかであらう。狩は、女性を狩つたのである。⁽¹²⁾

初段しかり、一二三段しかり。そして恐らく、『白鳥の湖』の狩も高藤の狩も、結果的にはそれは女を手に入れる狩であつた。貴公子達は、成人の直後に、何故真先に狩に出たのか、最早ここに繰り返すまでもないであらう。大人になれば、そうすることは、むしろ当然のことであつたのである。

六三段の「狩し歩きける」も、やがて女と巡り会うことになる

狩であった。このとき「行き会」った女は、「百年に一年足らぬつくも髪」の老女であった。猊色の果て、狙いがはずれて、思いも寄らない獲物に出くわすこともある、ということでもあらうか。

六九段、「狩の使」は言わずもがな。「狩の使」変じて、男はこの段では、あらうことか、「伊勢の斎の宮」を手中に落とすという禁じ手を犯すことになる。これも、発端は狩。しかし、狩はいつでもその標的を女性に転じる。

七〇段は、その後日談である。「狩の使より帰り来ける」「男」は、恐らく「斎の宮」との一夜を忘れることができなかったのである。う、大淀の渡りに宿りて、「斎の宮の童べ」に歌を詠みかけた。

みるめ刈るかたやいづこぞ棹さして我に教へよ海人の釣舟

「狩の使」転じた恋は、歌にあつては、「刈り」にも転じ、「釣」にも転じた。あの方に一目会いたい、「見る目」ならぬ「海松布」を我が手にできる渴はどちらの方か、海に棹差すからには指し示して教えてくれよ、釣する海人の舟人よ。「海松布」を力づくで我が物とするという「刈り」の原義は、「見る目」という懸詞を介して、切迫した恋の文脈においても見事に生かされている。この歌の「みるめ刈る」には、恐らく女を手に入れることが暗示されている。

二五段にも、これと発想を同じくする歌がある。

みるめなき我が身をうらと知らねばや離れなで海人の足たゆく

来る

言い寄って来た男の歌に対する「色好みなる女」の返歌。女は、「我が身」の「見る目無き」ことを「海松布」に懸け、言い寄って来る男を「海人」に見立てた。勿論、「海人」は女の「みるめ」を「刈る」のである⁽¹³⁾。

とすれば、前掲五七段、六五段、七五段の、序詞としての「海人の刈」るの諸例についても同様なことが考えられるであらう。これらの恋歌に詠まれた、海藻を「刈る」「海人」のイメージにも、恋する男自身の姿が揺曳していると読むことが可能なのではないか。

いずれにしても、七〇段においては、狩に始まる恋は、ごく自然に「刈り」に移行して行く。あるいは、それに続く「釣」も、その延長上に捉えるべきものであったかも知れない。⁽¹⁴⁾

続く七一段も、狩は恋に転じている。文中「内裏の御使」が、前段、前々段の記事に照らして「狩の使」であらうこと、すでに述べたが、この段ではその狩は、

恋しくは来ても見よかしちはやぶる神のいさむる道ならなくに

という、神をも畏れぬ、強気の恋に転じることになる。

そして、八二段、八三段の狩。しかしながら、惟喬親王を中心とする一行の水無瀬への出遊を語るこれらの段の主たる話題は、一行の風流と交情であつて、一見そこに恋への展開の可能性を読むこと

はできない。しかし私見によれば、「狩はねむごろにもせで」(八二段)という彼等の狩への出遊には、もう一つ別の目的が潜んでいた。それは、水無瀬の周辺、淀川流域に出没した遊女との交会であった(拙稿「伊勢物語のあそび」『文学季刊』第一〇巻第四号)。

「馬の頭」の詠、

狩り暮らし柵機つ女に宿借らむ天の川原に我は来にけり

「柵機つ女に宿借らむ」とは、そうした遊女との交会を、物語の舞台「天の川」に因んで牽牛織女の星合いに見立てたのである。⁽¹⁵⁾これらの狩においても、「狩り暮らし」てその獲物は、女に変わったのである。⁽¹⁶⁾『伊勢物語』において、狩はしばしば恋でもあった。

あるいは逆に、『伊勢物語』には、恋が狩の様相を呈する場合もあった。

女のお得まじかりけるを、年を経て呼ばひわたりけるを、からうして盗み出で、いと暗きに來けり。
(六段)

人の娘を盗みて、武蔵野へ率て行くほどに、盗人なりければ、国の守に搦められにけり。
(一二段)

まさに、*anti hunt*。これらの恋は、力づくで女を奪取して来る点において、狩に変わるところがない。『伊勢物語』においては、恋がそ

の実質において狩である場合もあったのである。

狩は、いつでも恋に転化する。恋もまた、場合によっては狩に變貌する。男にとって、狩と恋とは表裏一体、密接不可分のものであったのである。

だから男は、女に巡り会うべく狩に出掛け、出会うべくして女に出会ったのである。

五

狩猟と愛、捕食と交合という共生的相互作用は、読み書きをする以前にあった原始的主題で、出生と死のサイクルとか、死体からの靈的復活とか、生命の源泉としての死といった農耕文明的な主題よりずっと古い。すべての新しい生命の源泉としての身体と肉への槍の貫入が、狩猟生活のすがたであり、——それは同時に、愛と獲物の追跡である。
(『狩猟人の系譜』)

「狩猟と愛」、狩と恋とは、同根のもの、二つの現れであった。「両者は深奥からはとばしる生命の情熱、殺しとオーガズムのもつ悪魔的瞬間をともなっている。こうした二つの激しいのちの表現には、関連がある」。むしろ両者は、表裏一体とも言うべきもので、「狩猟と愛(あるいは死と性)の相補性にたいする感情は、宗教体系としてそれが形成されるよりずっと早く、人間的経験のなかに存在していた。男と女の性的結合と大きな獲物の追跡は、歴史以前の

過去においてもに人間の実存となった」(同書)のである。⁽¹⁷⁾

故に両者は、狩から恋へ、恋から狩へ容易に転換し得るのである。

ヨーロッパの文学においては、狩猟は、しばしば恋愛の譬喩に用いられている。

プラトンにまで遡る古代の作家もときどき、狩猟を恋する者が愛しい人を追求める様子のメタファーに使っている。しかし十二世紀から十六世紀にかけて、恋を射止める物語や詩は確固とした文学のジャンルとなった。特に、フランスやドイツの詩人は、想像の限りを尽くして愛と狩猟の類似をあげ、濃厚で手の込んだ愛の追跡を創作した。

(マット・カートミル『人はなぜ殺すか 狩猟伝説と動物観
の文明史』内田亮子訳)

ヨーロッパではまた、戦争が恋愛の譬喩に用いられることも少なくなかった。

久しい以前から言語(語彙)は、恋愛と戦争を等置してきた。いずれの場合にも、征服すること、奪取すること、捕捉することなどが問題になるのだ。恋に「おちる」主体は、そのたびごとに、男性が女性を奪い取らねばならなかった太古のやり方(外婚制を維持するための)にならっているのだと言えよう。

(ロラン・バルト『恋愛のディスクール・断章』三好郁朗訳)

むかしから自然な恋愛行為を描くのに、詩人たちは戦争の比喩を用いていた。愛の神は致命的な矢を放つ射手。女性が自分を征服した男性に降服するのも、その男性がもっともすぐれた戦士だからである。

(ドニ・ド・ルージモン『愛について』鈴木健郎・川村克己訳)

「征服」と言い、「奪取」と言い、「捕捉」と言い、「戦争の比喩」はそのまま、狩猟のそれに置き換えることが容易であらう。

「恋愛と戦争」のこうした類同性について、『愛について』は、「性本能と闘争本能との自然な、ということとは、生理的な関連性を確認するものである」と続ける。これもそのままに、「愛と狩猟」についても言い得ることであらう。さらに付け加えるならば、食糧を獲得する狩猟には、「闘争本能」に加えて、食欲すなわち生存の本能の発動のあったことを忘れてはならない。すなわち「愛と狩猟」の根底には、性欲と食欲という、生物としての人間の自己保存のための二大本能があったのである。表現における「愛と狩猟の類似」も、したがってそれらの「生理的な関連性」の自然な帰結であったと言いうことができよう。

翻って、『伊勢物語』、『伊勢物語』にも「愛と狩猟の類似」を見出すことができる。

例えば、初段。

狩に出掛けた先で、男は「女はらから」に巡り会う。「この男、垣間見てけり」。獲物を前にして「この男」のしたことは、「垣間見」であった。

しのびよりは、近くにいるとわかってから改めて動物に近づくことである。このなかには、後をつけると同じく、呼びだしや誘いだしもふくまれる。それは獲物の動きを探知し、どの辺の地域にいるか、天候の影響や風の状態がどうかを推測することである。「しのびよること」には、こっそりと低い姿勢でネコがはらばうように近づくのを彷彿させる。大地とそれを覆う植物の利用、獲物やその他の動物の真似、動く速度や動き方、飛びだす時期についての知識、これらすべてはひとつのモザイクの複合要素である。

〔狩猟人の系譜〕

狩から移行したこの「垣間見」が、狩猟における「しのびより」に当ると考えることに、大きな問題は無いであらう。「垣間見」をする男の緊張と「高揚」が、狩猟における緊迫に通じるものであったろうこと、容易に想像し得る。

続いて男の取った行動、「着たりける狩衣の裾を切りて、歌を書きて遣る」という、果敢にしてやや激しい行動が、狩猟における「呼びだしや誘いだし」に当ることも論を俟たない。恐らく男は、鋭利な刃物を以て自らの狩衣を切り取っている。

咄嗟の判断、果敢な意志、俊敏な行動、これらは狩猟に必要不可

欠のものであった。それらはすべて恋する男の行動として、「女はらから」へ向けられたのであった。

春日野の若紫のすり衣しのぶの乱れ限り知られず

男の「誘い出し」の歌。「春日野の若紫」とは、まさしく「大地とそれを覆う植物の利用」の最たるものではないか。

知力、体力、様々の戦略を駆使して、男は女に迫った。それは、狩の醍醐味にも通ずるものであらう。男にとっては、狩とともに、恋も、また楽しいものであった。

しかし、楽しさは常に、人を溺れさせる危険性を持っている。恋が、場合によっては猟色に堕してしまうことのある所以でもある。

「垣間見」からこの歌の送致へと至る、男の一連の行動を、『伊勢物語』は「いちはやきみやび」と呼んだ。「みやび」ではあっても、それは、「いちはやき」と評されるべき行動であった。

「いちはやし」の語義として、大槻文彦『大言海』は、用例としてこの例を引き、「(一)最、速シ。スバシ。疾速」を掲げている。

この速さこそは、狩する男の、即断即決、雷光石火の行動のそれ他にならない。

『大言海』は、続いて「いちはやし」の語義として、「(二)敵シ。烈シ。敵烈」を挙げる。その激しさ。それもまた、狩のものであらう。生殺与奪、まさに峻烈な激しさで、男は「女はらから」に迫ったのである。

狩から転じた恋は、速さと同時に激しさを伴う。狩する男の恋とは、激しいものであった。

初段において、男は、「いとなまめいたる女はらから」を「垣間見」て、度を失ってしまったと言う。「思はず、古里に、いとはしたなくてありければ、心地惑ひにけり」。男の激情を想うべきであらう。

しかし、男は、その「心地惑ひ」から辛くも体勢を立て直した。体勢を立て直して、大胆かつ細心に獲物に迫った。その呼吸は、狩のものであった。

こうして彼は、見事に一人前の男となるための試練を乗り越え、大人への階段を登ったのである。

『伊勢物語』初段の恋は、終始、激しい勢いのもとに展開した。しかし、それは初段に留まらない。前掲、六段、一二段などは、その典型として数えられるであらう。『伊勢物語』において、恋は、積極果敢なものであって、熱烈、軽妙、傍若無人、いずれにしても、それは激しさをその基調とするのであった。⁽¹⁸⁾

例えば、四〇段の恋。身分は低いけれども「けしうはあらぬ女」との恋を「さかしらする親」に妨害された「若き男」は、悶絶して「真実に絶え入」ってしまう。これほど一途な恋があらうか。「昔の若人は、さるすけるもの思ひをなむしける。今の翁まさになむや」。四〇段は、初段結語、「昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける」に似た結語によって締め括られている。

あるいは、六五段。「在原なりける男」は、恐らくは、二条の后ら

しき女に恋慕してしまう。禁断の恋にも拘らず、恋情止み難く、男はただ神仏に縋るしかなかった。

かくかたはにしつゝありわたるに、身もいたづらになりぬべければ、つひに滅びぬべしとて、この男、「いかにせむ。我がかゝる心止め給へ」と仏神に申しけれど、いや勝りにのみおぼえつゝ、なほわりなく恋しうのみおぼえければ、陰陽師、巫呼びて、恋せじといふ祓の具してなむ行きける。祓けるまゝに、いと悲しきこと数勝りて、ありしより異に恋しくのみおぼえければ、

恋せじと御手洗川にせし禊神はうけずもなりにけるかなと言ひてなむ去にける。

しかし、神も仏も、陰陽師も巫も、男の激情を如何ともし難かった。男は、我が身の定めを悟り、訣然、女のもとへ走ったのである。

身分違いの恋、許されざる恋。様々の制約や障害などには目もくれぬ、激しい恋を、『伊勢物語』の男はしたのである。狩を好む心性に発する『伊勢物語』の恋とは、けだし激しいものであった。

『伊勢物語』にこうした激しい恋が描かれたことと、この物語の主人公が、官職を以て呼ばれる場合には、一貫して武官として登場することとは、恐らく無縁のことではなからう。「在五中将」(六三段)、「右の馬の頭」(八二段)、「中将」(七九段・九九段)、『伊勢物

語』の主人公は、一貫して武官すなわち軍人として形象されている。⁽¹⁹⁾「愛と狩猟の類似」に留まらず、「恋愛と戦争を等置」することができるとすれば、戦士の恋が戦争にも比すべき激しさを持つことは、その「闘争本能」に照らして当然のことと言うべきであろう。

軍人「中将なりける男」の、軍事演習「右近の馬場のひをりの日」における恋を描く、九九段などは、その典型として解し得る段である。

狩にせよ戦争にせよ、それらと「生理的な関連性」を強く持つ恋は、当然、激しいものとなるであらう。それは「激しいのちの表現」であって、「深奥からほとぼしる生命の情熱、殺しとオーガズムの悪魔的瞬间をともなっている」とも言い得る、激情の発現なのであった。

勢い、そうした恋は、攻撃的であり、危険なものにならざるを得ない。

すべての食肉類には、ヴェネラルな攻撃、愛することと狩猟することとを混同する危険がある。特に男性間では、狩猟本能の悪用から他の人間を守ることが大切である。(中略) おそらく攻撃と愛を分けるものは紙一重で、それが攻撃を本能的にかわしうる女の姿態をもたらすのである。メスは、新しく向けられた激怒の目標となろうと、あるいは乱暴な狩人の性的餌食となろうと、かれの暴力をかわすだけでなく、それを受けいれるのである。

る。

(「狩猟人の系譜」)

ここに、人畜無害の、悠長典雅な恋などあり得ない。「おそらく攻撃と愛を分けるものは紙一重で」あって、恋も一つ間違えば、その暴力性を顕わにする危険性を孕むものであった。

実際、狩がいかに暴力的なものであったか。それは、当時再三にわたって出された狩猟の禁令によっても窺えるところである。それは、単に仏教の殺生戒によるものばかりではなかった。

貞観五年三月十五日、太政官符「禁制国司并諸人養鷹鷄及狩禁野事」。

今聞、或国司等多養鷹鷄、尚好殺生、放以狝徒縦横部内、強取民馬乗騎駈馳、疲極則弃不帰其主、黎庶由其悲吟農耕為之闕怠

而今或聞、輕狡無頼之輩私自入狩、以擅場、鳥窮民苦更倍⁽²⁰⁾昔日⁽²¹⁾ (「類聚三代格」)

「狝徒」は狩の余勢を駆って、農地を蹂躪、のみならず掠奪に走り、「輕狡無頼」の限りを尽した。狩も一つ間違えば、人民に害をなし、秩序を紊乱するものであった。延喜五年には、同様の理由を以って「諸院宮家」の「狩使」が禁止されている(「類聚三代格」)。「九条右丞相道誠」が「鷹犬」を固く禁じたのも、狩がこうした危険へ

の傾斜を持つものであったからであろう。⁽²¹⁾

恋がもし、こうした狩の延長に位置付けられるものであるとするならば、その恋も、また危険窮りないものとなる。

ふたたび『伊勢物語』六九段。「狩の使」変じたこの段の恋は、まさしく禁断の恋であった。恋の相手は、「伊勢の斎の宮」。朝家を代表して清浄の身を以て皇祖神に仕えた内親王であった。男はこの人との恋に落ちた。それはまさに、神をも、そして朝家をも畏れぬ所業であった。

恋の持つ暴力性を、この段は典型的に描き出している。斎宮との恋を語ると思われる段は、さらに七〇段、七二段と続く。

『伊勢物語』の危険な恋はこれに留まらない。

例えば、二条の后との禁断の恋。三段、四段、五段、六段、六五段、七五段等々。

その他、『伊勢物語』には、読みようによっては、こうした危険な恋の話と解される段が少なくない。必ずしも狩とは直接の關係を持たなくとも、『伊勢物語』の恋には、狩のそれにも比すべき危険性を孕むものが多いのである。恋はそれ自体、権力と鋭く対立する。

たとえ、それが何らかの禁忌に触れるまでには至らなくとも、『伊勢物語』の恋は、一般に積極果敢なものであり、多くは果断にして激しい。平安朝の物語の、貴族の恋と言えば、情緒纏綿、艶麗優美なものを予想するのが一般であらう。しかし、『伊勢物語』は、その予想を見事に裏切るのである。

『伊勢物語』の恋はど激しく、一面で暴力的でさえある恋は他に

そう無い。その意味では『伊勢物語』は、文学史に屹立していると言うことができる。

『伊勢物語』の恋は、狩を好む男のものであった。狩をする男の恋は、その狩と同じく峻烈であった。

六

そもそも、狩を好む男の心性とはいかなるものであったか。

『狩獵人の系譜』は、「狩獵人」とはまったく対照的な心性を有した人々、「文明化された歴史時代の農業国の後期農耕人—農民」の特性を、いささか性急ながら、次のように描き出している。

かれらは土着の土地に執着し、祖先をうやまい、生ませ、め、強い行動規制をもっている。かれらは単純で、勤勉で、頑迷で、迷信家である。しかし単純であることは頭の回転がにぶいことでもあり、勤勉は、苦しい仕事、安全・尊敬・敬虔の価値や証拠に代ることばとみなすことができる。その他の美德は、単調な繰り返し生活を婉曲に表現したことばであって、その生活にみられる人間的頑固さが、満足や賢明さであると誤解されている。

農民は家庭を農業に結びつけた。家事は野外作業のように、陳腐で単調である。オスとメスのヒツジを交配させるように、結婚の相手、その選択の目安は、大抵便宜的に決められるのが

普通である。

「狩獵人」は、まったくこの対極に位置している。ここに挙げられた一々を、すべて反転させたのが、「狩獵人」であった。狩を殊の外に好んだ『伊勢物語』の男にも、そうした傾きがあったのではないか。もしそうだとするならば、彼は、「文明化された歴史時代の農業国」にあつてはきわめて特殊な存在であつたかも知れない。⁽²²⁾

『伊勢物語』は、そうした男の生涯を語る。しかしその恋は、その好んだ狩にふさわしく激しいものであつた。

男は激しく恋をする。その激情に駆られて、彼は狩に出たのである。

注

(1) 「かうぶり」がサ変動詞「す」と結合して「かうぶります」という一語のサ変動詞となり、「元服する」の意に用いられている(森本茂『伊勢物語論』)。

(2) 一八九六年ユルゲンソン刊スコア(森田稔『永遠の「白鳥の湖」チャイコフスキーとバレエ音楽』所収)による。

(3) 「白鳥の湖」の物語は、『ジゼル』や『ドナウの水精』など、当時バレエで一般的に行われていた題材と、ムゼウスの『盗まれた羽衣』や、あるいはオペールのオペラ『妖精の湖』などからとった、いろいろな話の混合物であつた、と言う(森田・前掲書)。

(4) 狩が「あそび」の一つであつたことについては、拙稿「伊勢物語のあそび(承前)」(『文学 隔月刊』掲載予定) 参照。

(5) 弘仁三年九月二〇日、「依天平勝宝格、東大寺四面二里之内、不聽殺生」の遵守を諷って、「宜更禁止有犯科罪」の禁令が出される(『日本後紀』)。また、承和八年三月一日には、「勅、大和国添上郡春日大神々山之内、狩獵伐木等事、令_レ当国郡司殊加禁制」と言う(『続日本後紀』)。ただし、これらが『伊勢物語』初段、「奈良の京春日の里にしろよ」との「狩」とどう関わるか、詳らかでない。

(6) 『伊勢物語』初段について言えば、菓子の変以来、在原業平一族に加えられた政治的圧迫が、これらの複雑さを構成する要素の一つであつた、と読むべきかも知れない。

(7) 『後撰和歌集』によれば、在原行平の事績。

(8) 狩の獲物を枝に付けることには、故実があつた。「春ハ梅桜柳、秋冬ハ鳥柴、冬至ヨリ後ハ梅ヲ用タリ」(『鷹經弁疑論』)「鳥ヲ木枝ニ付ル事」、「春は梅椿、冬は松神、秋は楓などに付る也」(『責鷹似鳩拙抄』「鷹の鳥を木に付る事」)。

(9) ただし、他本には「摺狩衣の袂に鶴の形を作りて書き付けゝる」とあつた。

(10) 例えば、『能宣集』の屏風歌に、

九月、山里なる人の家に女どもの侍る所に、鷹据ゑたる男まで来た
り。菊の花侍り。

かりに来む人に折らるな菊の花うつろひはてむ折までも見じ
また

はしたかを手に引き据ゑて山里の宿かりにこそ今日は来にけれ
などとなるように、狩する男の女との出会いは、好んで屏風絵の画題とされたが、これらも同様に考えられるであろう。

(11) 女を「釣る」例。狂言『釣女』(「釣ろよ／＼おかつ様釣ろよ 下女を添へて釣ろよ 十七八を釣ろよ」(『狂言記』)。

(12) 狩はまた、貴族にとっての外出の表向きの理由とされることもあつ

た。『竹取物語』では、帝は「御狩の行幸し給はむやうにて見てむや」と、狩を口実にかぐや姫のもとを訪れる。勿論その目的も、女との出会であった。

(13) 一〇四段、「尼になれる人」に男の詠みかけた歌、

世をうみのあまとし人をみるからにめくはせよとも頼まるゝかな
やはり「見る」に「海松」を懸けるが、この歌ではさらに、「目配せよ」に「海布食はせよ」を懸け、女を我が物とすることを寓意する。すなわち、海松布を刈って食べることは、女を手に入れることの譬喩的表現であった。

(14) 「海人の釣舟」の方も、禁断の恋ゆえに追い詰められて夢にも縋りたい思いの男に対して、海にかけては専門家、海のすべてに通曉し、自在に獲物を釣り上げる、頼もしい味方を暗喩して、ここではなお、恋の達人をイメージさせるものとなっているのではないか。

(15) 勿論、遊女との交会は恋ではない。しかし、それが擬似的なものであるにせよ、女性を獲得する点において、そこには *game* の原理はなお生きていると認められよう。

(16) 『貫之集』にも、「小鷹狩」と題して、

秋の野に狩りぞ暮れぬる女郎花こよひばかりの宿は貸さなむ
もくさの花は見ゆれど女郎花咲けるがなかに狩り暮らしてむ
などある。無論、「女郎花」は女を寓意している。

(17) 「Venerie」という語には古語用法として性交と狩猟という二つの意味がある（『狩猟人の系譜』訳注）。

(18) 一方、「源氏物語」の男達は狩を好まなかった。それら『源氏物語』の恋と『伊勢物語』との恋には、対蹠的な違いが認められるであろう。

(19) 無論これは、近衛将監、左兵衛権佐、左近衛権少将、右馬頭、右近衛権中将等を歴任したという在原業平の関歴に対応する。

(20) 『新訂増補国史大系』によれば、『類聚三代格』金沢文庫旧蔵本は、「輕

狡」に対して、「ケイカウ」とともに「ハヤワサ」の傍訓を加えている。なお、この「輕狡無頼」は、『日本三代実録』在原業平卒伝に言う「放縱不_レ拘」に繋るものであろう。

(21) 「凡放鷹獵獸之遠遊者、王者臨_レ国之機、不_レ可_レ過。雖然逸興与珍羽之遊、違_三王者之望_一者、令_三民至_三荒蕪之田_一、令_三物落_三不_レ慈之役。嗟呼放鷹獵獸之差別、無_三遠慮_一之、難_三言_三成_三功_一焉」（『菅家遺詠』）。

(22) 例えば、清和天皇は狩を好まなかった。その崩伝には「天皇風儀甚美、端儼如_レ神、性寬明仁恕、溫和慈順、（中略）好読_三書_一伝、潜_三思_三积_三教_一、鷹犬漁獵之娛、未_レ嘗_レ留_レ意」（『三代実録』）とある。

付記 本稿の着想は、昭和五十九年、京都における、佐竹昭広・今西祐一郎両先生との『伊勢物語』の会説に由来する。ここに銘記して、学恩の記念としたい。

（うえの・えいじ） 成城大学文芸学部助教授